

2022年度 A 日程

# 福岡大学法科大学院入学者選考試験

## 小論文

### 問題冊子（問題のみで3枚）

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に申し出てください。
- 3 解答は、別に配布する解答用紙に、黒インクのボールペンまたは万年筆（いずれも、インクが消しゴム等で消せないもの）で記述してください。
- 4 解答用紙上部の受験番号欄に受験番号を、また氏名欄に氏名（およびフリガナ）を記入してください。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

(60点満点。配点は、設問1が30点・設問2が30点。)

今回の「新型コロナ・ウイルス肺炎」の蔓延は、二つの意味で「歴史的」な事件と見なされることだろう。まずはもちろん、これが現代史を分かち画期的な惨事として、未来の文明に深い影響を残すだろうからである。だがそれ以上に大きい意味は、この悲劇が近代人の秘められた…(略)に冷や水を浴びせ、人類の過去の…(略)への復帰を促すと考えられることである。

(中略)

現代人の不安と恐怖は中世人の怯えよりも過酷だといえる。中世においてはまず死が日常の中であって、人々がそれに耐える感性を備えていたからである。戦争が日々に街なかで闘われ、斬首や獄門という刑も大衆の面前で執行された。もとより餓死者や病死者の数も多く、街頭で行き倒れを見る機会も少なくなかった。人々は家族の死を家庭のなかで看取り、湯灌から納棺、土葬までみずからの手でおこなっていた。

これに応じて民衆の心の備えも手厚く、信仰心も強ければ世界観としての無常感も身につけていた。とりわけ日本人の無常感は独特の感性であって、特定の宗教宗派を超えてこの世と我が身の儚さを見明きらめ、そのことをおびたしい歌に詠んで、諺にも記してみずからに言い聴かせてきたのだった。

一方、現代人は長らく死から逃避し、死から目をそむける習慣を養ってきた。死体の処理は専門家の手に委ね、葬儀でさえしだいに簡略化する方向を選んできた。とくに第二次世界大戦後の日本人は戦死者を見聞する機会もなく、長寿社会を謳歌するなかで死を直視する強靭さを失ってきた。昨今の報道で新型コロナ肺炎による国内外の死者の数を知り、死が他人事ではないことを感じる恐怖は格別に深いはずなのである。

(中略)

数々の自然災害と比べても、感染症の人に与える恐怖と不安は独特のものであって、深刻さは桁はずれに大きい。地震であれ台風であれ、自然災害は目に見えるのに対して、感染症はその病原体も感染経路も闇に隠れている。見えない敵が怖いのは人間の本性であって、何にどこまで脅えたらよいのか、それがわからないことが不安を倍加する。

そのうえこの恐怖はいつまで続くのか、先行きがまったく見えないことも焦燥を煽る。…(略)「スペイン風邪」の鎮静までには三波にわたる執拗な襲来があり、その度に新しい恐怖の更新が続いた。新型コロナ肺炎の場合、まだ…(略)いつ終わるかもわからず、終焉までに何波が襲来するのか先が見えない。

しかし、とくに近代人にとってこの災害が耐えがたいのは、それに対抗して「する」ことがないということではないだろうか。日本政府の「緊急事態宣言」を受けて、国民が要請されているのは外出しないことであり、出勤しないことであり、営業しないことである。いずれも何かを「しない」ことであって、何かを「する」ことの正反対の要請である。

(中略)

振り返れば近代的な人間にとって、何もしないことが美德であった経験は一度もない。マックス・ヴェーバーの説く資本主義の徳目の筆頭は、いうまでもなく時間を惜しんで働き続けることであった。とりわけ日本人は近代以前から勤勉であり、宗教的な「安息日」の観念を持たないこともあって、休むことが奨励に値するなどは夢にも思ったことがなかった。

(中略)

歴史上すべての疫病はいずれ終息することが知られている。現在の新型コロナ肺炎の去った後に、どんな将来世界が残るのか、いな、残さねばならないかは今から考えておいてよい課題だろう。

…(略)。遠い未来に現れる影響は予言できないが、当面の世界は…(略) 緊急の問題を抱えていることが、このコロナ禍によって先鋭に暴露された…(略)。

ほかならぬグローバル化がそれであって、これが疫病流行の直接の原因だったことは問わないまでも、この災厄の防御に何の役にも立たなかったことは露骨なほど明白だった。民衆を守ったのは国家であって、それも自衛のために一国主義的に働く国家であった。この国家の姿勢の是非は暫く措いて、万人が思い出したのは、市場は富の分配には貢献するが、富の再分配に役立つのは国家だけだ、という永遠の真理ではなかったろうか。

たぶん今後の人類はグローバル化の暴走には慎重になり、とくにグローバル企業の国家への挑戦に批判的になるだろう。…(略)。

(中略)

しかしそうした現実の課題と並んで、おそらくそれ以上に重大なのは、やがて起こり始める国民各自の世界観の転換であろう。…(略)、今回の歴史的な悲劇を経験することを通じて、誰しも実感したのは自己が密かに抱えてきた近代的な傲慢だったにちがいない。疫病が社会を世界規模で揺るがすのは昔の話であって、現代はつとに別次元の時代を画しているという通念が傲慢にほかならず、ただの妄信にすぎなかったことを万人が思い知ったのではないだろうか。

現代もまた歴史的に古代や中世に直結しており、その間に多彩な変化や改良は試みられたものの、文明の進歩と呼びうる価値的な飛躍は起こらなかった。文明は自然との交渉のなかで勝ったことは一度もなく、何千年も暫時の妥協を繰り返してきたにすぎない。今後もその事態は続くだろうし、人類は文明を守る努力は捨てられないが、文明を進歩させるという迷信は諦めるべきである。当面の現実を変える刻苦勲励は怠ることなく、しかしそれが歴史を画するという世界観、進歩主義のイデオロギーは忘れなければならない。

おそらく二十一世紀の時代思想として、今後の日本人はこのように考えを改めようし、そうあってほしいというのが私の願いである。そしてさらに私の願いを広げれば、今回の経験が伝統的な日本の世界観、現実を無常と見る感受性の復活に繋がってほしいと考える。無常感とは国民の健全な思想であって、間違っても感傷的な虚無主義ではない。現実変革の具体的な知恵と技を發揮しながら、にもかかわらずそれを無常の営み、いずれは塵埃に戻るつかのみの達成にすぎないと見明きらめる、醒めた感受性なのである。

「色は匂へと散りぬるを、我か世たれそ常ならむ。」かな文字を読むすべての国民が学んだこの真実が、今、人知れず反芻され共有されつつあるように思われてならない。

(山崎正和「二十一世紀の感染症と文明」『哲学漫想』所収から。縦書を横書きに変えたほか、出題の都合上、記載を省略した部分等有る。)

#### 設問 1

筆者の考えや願望によれば、今回の「新型コロナ・ウイルス肺炎」の蔓延は、今後の日本人にとって、どのような意味で「歴史的」な事件と見なされるのか、説明を書きなさい。

#### 設問 2

現在の新型コロナ肺炎の去った後に、どんな将来世界を残さねばならないかについて、あなたの意見およびその理由を、筆者の考えや願望との異同も示しつつ、書きなさい。